
リリカルなのは アナザーダークネス

観測者と語り部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは アナザーダークネス

【Nコード】

N4631Z

【作者名】

観測者と語り部

【あらすじ】

少女の犠牲によって憎しみと悲しみの連鎖は終わるはずだった。しかし、犠牲になった少女自身が憎しみを抱かないとは限らない。

次元の彼方から少女は還ってきた。心に灯す復讐の焰を爆発させるために。

果たして、憎しみの連鎖を止めることは出来るのだろうか？

憎しみの始まりなの（前書き）

初めまして。

以前、長編を連載しようとして失敗した語り部です。

今回は、その長編の一部をアレンジして書いていききたいと思います。

謎の文体、誤字脱字が目立つ作品になるかも知れませんが、最後までお付き合い頂ければ幸いです。

憎しみの始まりなの

時の庭園。

ブレシア・テスタロッサがアルハザードへたどり着くために意図的に起こした次元震は、時空管理局と高町なのはやフェイト・テスタロッサによる尽力によって最悪の事態を引き起こす事なく幕を降ろした。

しかし、ジュエルシードによって引き起こされた次元震。その力は一時的とはいえ、時空に亀裂を発生させ、虚数空間の入り口を開けていた。

この時、時空管理局のアースラは次元震の対処に追われて気が付くことが出来なかった。虚数空間から偶然。いや、意図的に意志を持って現れたロストログアの存在に。

side ????

(憎い！憎い！憎い！)

その存在は心に憎しみをため込んでいた。憎悪は心を焼き尽くす焔となって存在に力を与える。

(憎いぞ、時空管理局！我から日常を奪った時空管理局！！)
その存在は怒り狂っていた。ささやかな日常を奪われた怒り、そして、悲しみが負の感情を増幅させ、更なる憎しみを呼ぶ。

（許しはしない！我を騙し！我を裏切った

！）

その存在は信じることを忘れた。かつて、自分を支えてくれた人は結局は自分を騙し続け、信頼していた心を踏みにじられたから。

（同じ目に遭わせてやりたい！私の目の前で家族を消し去った

のヤツに！）

その存在は優しさを失った。かつて温もりを与えてくれた家族を復讐という理由で奪われたから、復讐されて傷ついた心は養分となつて新たな復讐の誓いを芽生えさせた。

（許しはしない！我だけでなく罪無き友を抵抗しただけで我もろとも封じた時空管理局！お前たちを許しはしない！必ず我らが滅ぼしてくれる！！）

その存在は笑顔を失った。弱り果て苦しむ自分を励ましに来た四人の友。大を救うための犠牲として巻き込んで死なせてしまった友。自責の念と罪悪感は喜びと楽しみの感情を奪い、侮蔑の笑みしか浮かべなくなつた。

その存在は力を解放すると転移魔法を発動させる。ジュエルシードの巨大な魔力が転移魔法の魔力をアースラから隠し、その存在がいた事を知らせる事はなかった。

後の闇の書事件は最悪の形で展開する事になる。アースラがこの存在に気が付いていれば事態が変わったかもしれないが、もう、遅い。

憎しみの連鎖が再び始まるうとしていた……

憎しみの始まりなの（後書き）

正直、この時点で存在の正体が分かる人は多いと思います。

の中には人物のフルネームが入りますので予測してみてください。

エンディングテーマは対象aが一番しつくり来ます。

第1話 新たな存在が生まれるなの（前書き）

文章量をもっと増やした方が良いですかね？

第1話 新たな存在が生まれるなの

side ????

とある管理外世界。その世界の白銀の地に彼女は降り立った。辺りは雪が降り注ぎ、大地は白く輝いている。その光景の中で少女が空からゆつくりと地上に降り立つ所を他人が見れば天使が舞い降りたと錯覚したかもしれない。

もつとも、今の時刻は深夜であり、この寒さが厳しい世界で、北に位置する場所。しかも、高い山と深い森の奥深くに隠されたように存在する盆地を訪れる人間は余程の事がない限り存在しないだろう。

少女の姿は異質だった。毛先が黒い白銀の髪に闇を凝縮したような瞳。背中には六枚三対の漆黒の翼を生やし、右手に十字をあしらった背丈と同じくらいの長さを持つ杖を、左手に禍々しい雰囲気を放つ本を抱え、さながら墮天使を彷彿とさせる姿をしている。

少女は左手に持った本から手を離す。すると本はひとりで浮かんで少女の目の前に移動した。そして、本は凄まじい勢いでページを捲る。少女が求める力を引き出す為にページに記された魔法を探し出しているのだ。

やがて、目的のページまで捲り終わり少女に必要とされる魔法を映し出す。それを見た少女は右手の十字杖を正面に構え横に掲げる。足元に紫色の三角形をした魔法陣が浮かび上がり、リンカーコアか

ら力を引き出す。

発動させた魔法は小さな隠蔽結界。少女がこれから起こす大魔法を外に漏らさないように張った小さくも強力な力を秘めた結界である。

次に少女は開いた左手を本に向ける。すると本は真ん中のページを開き、表紙を少女の方向に向けるように反転した。そして、紫黒の輝きを放つと少女の目の前に同じ大きさの氷塊を四つ吐き出した。

氷塊の大きさは少女の身体より少し大きい程度で、まるで、棺のような形をしている。

少女は溜め息を吐くと、小さく呟いた。その顔は無表情だが泣いているように見える。

「お前たちには悪いことをした。我の厄介事に巻き込まれ、死なせてしまった事はどれだけ赦しを請うても赦されぬ、我の最大の罪にして罰であろう」

少女は嘆く、二度と赦されぬ罪に苦しみ、されど、涙を流すことは許されない。

「だが、許してほしい。我の身勝手な目的の為に前たちのリンカ―コアを利用することを」
少女は慟哭する。罪無きかつての友の体を利用する罪悪感に、力無き自分の弱さに。

「それに、我は独りが寂しい。あの幸福を知ってしまった今では刹那の孤独にすら耐えられぬ。かつての家族を取り戻す事もはや叶

わぬ」

少女は誓う。身勝手な自分に付き合わせる、新たな存在を満足させる行為が、かつての友が望む願いを叶えることが少しでも贖罪になると信じて。

「だから、誓おう。お前たちが例え私の行為を否定し、裏切ったとしても我はお前たちの願いを出来る限り叶えることを。例え、偽善だと言われても我は私の意志をつらぬこう」

そして、少女は大きく息を吸うと叫んだ。心に秘められた苦痛を少しでも吐き出すかのように叫んだ。

「さあ！蘇れ！！新たな力と秘められた力を融合させ新たな存在として！」

少女の叫びに呼応するかのようになら四色の光が飛び出す。

ひとつは熱き炎を宿し、強さと決断力を備えた忠義を秘めし桃色の光。

ひとつは無邪気さと子供らしさを秘め、大切な存在を守るために必死になる紅き光。

ひとつは優しさと残酷さを備え、皆を影から支える緑の光

ひとつは寡黙の内に熱き心を宿し、自らの危険を省みず仲間を守護する蒼き光。

四つの光は少女に挨拶するかのようになら周囲を飛び回ると、四つの氷塊に閉じこめられた人物の胸の内にそれぞれ飛び込んで行く。

そして、再び外へ飛び出した四つの光は本の中へと戻っていった。本は光を内側にしまい込むと、そのページを閉じて再び少女の左手に戻る。

次に少女は十字杖をペンダントに戻して首に掛けた。本を両手で抱え、正座をしながら目を閉じて集中する。

内側に取り込んだ四つの光を新たな存在にする為に少女は大魔法を発動させる。少女のリンカーコアが力を引き出す為に、輝きを増し、熱さを伴って胸の内側で暴れる。しかし、その感覚ですら少女は心地よく感じた。

今の周囲には人の身に余る膨大な魔力が溢れている。少女が事前に隠蔽結界を張らなければ、巡回している管理局が気が付いて捜査を開始していただろう。

今、本の内側では新たな存在が闇に包まれて生まれようとしていた。活発な光を放つ真紅のリンカーコアと熱き炎を持つリンカーコアは引かれ合うように融合した。

紫電をまとう黄色いリンカーコアは自ら積極的に紅きリンカーコアを取り込み、無邪気に新たな輝きを放つ。

桃色の巨大な光を放つリンカーコアは弱々しく明滅して輝き、緑のリンカーコアが癒すように周囲を飛び回りながら、ゆっくりと少しずつお互いに融合していく。

淡い紫色のリンカーコアは戸惑うように輝いていたが、やがて落ち

着きを取り戻し、静かに蒼き輝きを放つリンカーコアと融合した。

本の中で巨大な力が渦巻きプログラムを無数に構築する。膨大な力が少女のリンカーコアを圧迫し、魔力を喰らい弱らせる。少女は全身に苦痛を感じ、身体に熱さを伴うが、歯を食いしばって必死に耐え、魔法を制御していた。この魔法を失敗させれば少女の耐え過ぎた悠久の時間が無駄になってしまうから。だから、全身を襲う苦痛も身体にまとわりつく不愉快な汗の存在も少女は無視して魔法を必死に制御する。

やがて融合は終わり、本の中で新たな四つの存在が生まれる。

ひとつは活発な輝きを放ち内側に焰を宿す黄金のリンカーコア。

ひとつは紫電を纏い無邪気に輝く水色のリンカーコア。

ひとつは膨大な魔力を秘めし巨大な光を放つ暁のリンカーコア。

ひとつは落ち着いた輝きを放つ、静かな雰囲気を纏った淡い紫色のリンカーコア。

新たな存在として生まれた四つのリンカーコアは自信の肉体を闇の中で構築して行く。

魔法を操作していた少女も落ち着きを取り戻し、静かに左手で汗を拭う。後は本に秘められた意志と少女自身がサポートを続ければ四つの存在は勝手に生まれてくるであろう。

（私の新しい親友、私の新たな家族。早く生まれるが良い。もはや何の価値もない世界では、お前たちの存在だけが私の支えだ）

この時だけ無表情の少女は忘れたはずの優しい微笑みを浮かべていた。もっとも、少女自身は気が付いていなかったが。

静寂に包まれた白銀世界。雪の降り積もる地で静かに儀式魔法は続く。

第1話 新たな存在が生まれるなの（後書き）

少女と二つのリンカーコアは分かると思います。残る二つはオリキヤラです。

次はなのは *side* ですが、日常を上手く書ける自信はありません

第2話 誕生した4人の守護騎士なの（前書き）

まずは皆様に土下座を致します。すいませんでした。作者もこれほど更新が遅れるとは思いませんでした。深くお詫びします。

作者の文才の無さに絶望し、GODをプレイしてマテ子たちの印象が変わり、プロット変更中です。そして、レヴィよ。なぜ暴走する話が進められないorz

第2話 誕生した4人の守護騎士なの

side ????

雪降る白銀世界。静寂に包まれたこの世界。しかし、世界の静寂は今、破られようとしていた。

少女は歓喜に包まれている。新たな存在が少女の目の前で生まれたからだ。禍々しき本から生まれた四つの存在。その姿は少女の生前の友と瓜二つの姿をしていた。

少女は四つの存在を愛おしそうに見つめる。

一人は暗い茶色の髪を肩まで伸ばした少女。私立聖祥大学付属小学校の制服に似たバリアジャケットを身にまとっている。しかし、その色は黒く、リボンの色も夜の色をしている。浮かべる表情は無表情で冷たい雰囲気纏っているが、彼女を見つめる少女には泣いているようにも、後悔しているようにも見えた。

少女は次に二人目の存在に目を向ける。

今度は毛先が黒い青色の髪を、青色のリボンでツインテールにまとめた少女。何を考えているのか分からないが、表情は明るくニコニコと笑顔を浮かべている。バリアジャケットは元になった少女と対して変わらないようだ。

さらに、隣の存在に少女は目を向ける。先程の少女が「カツコイ
自己紹介すらしてないのに、ボクを無視するな〜！」とか、矢継ぎ
早に喋っているが話が進まないのも無視する。

今度は先程と違い、明るい燃えるような金髪をした少女。所々紅い
リボンで髪を縛り、私立聖祥大学付属小学校の制服をチャイナドレ
スにアレンジしたようなバリアジャケットを着ている。その色はや
はり黒い。そして、腰には刀型のアームデバイスを差していた。

表情には勝ち気な笑顔が浮かび、小さな胸を堂々と張って偉そうな
格好をしていた。

少女は内心で、我より偉そうにするな、とツツコミをしながら最後
の存在を見つめた。青色が「ボクより偉そうにするな　、ボク
の存在感を返せ」とか叫んでいるが気にしない。

最後の存在は困惑した表情を浮かべている少女だ。

紫色の髪をカチューシャで纏め、元になった存在とは違う色の瞳。
紅い瞳に時折、変色を繰り返すのは力を上手く制御出来ていないか
らだろう。

バリアジャケットは漆黒のイブニングドレスに所々フリルをあしら
っており、長い漆黒のドレスグローブは強い魔力が込められた武器
だ。

頭には髪の色と同じ大きな獣耳が、狼の耳が生えている。ドレスに
隠れて見えないが、恐らく狼の尻尾も生えているだろう。

四人とも闇を凝縮した瞳をしており、生気を感じさせない、冷たい死の雰囲気から感じられた。

やがて、四人の存在を見回した少女は口を開いた。

「初めまして、名も無き新たな守護騎士たち」

少女が挨拶をすると四人の新たな守護騎士は雪の上に跪いて挨拶を交わす。

「初めまして、我らの新たな主」

「初めまして！会いたかったよ　　」

「初めましてね、こんな寒い所で生まれるなんて思いもしなかったけどね！」

「初めまして、うう、なんで獣耳と尻尾が生えてるのかな」

四人は口々に挨拶を返すと新たな主の顔を見た。その表情は悲しみに満ちていて、四人はどうして良いか分からず困惑する。
主たる少女が悲しげな表情で呟く。

「　　か、懐かしい名前だ。我がその名で呼ばれたのは何年前だったか」

主の呟いた内容を聞き、青色の少女に様々な意味が込められた三人の視線が痛いほど突き刺さり、青色の少女はうなだれた。
その様子を見た、主たる少女は青色の少女を助けるために再び、言

葉を発する。

「気にするな、我は気にしておらぬ、お前たちもそやつを責めるでない。だが、
の名。これから行く復讐には相応しくない名だ」

やけに復讐の言葉を発した主たる少女に茶色の髪の子は眉を歪めた。だが、それも一瞬の事で気が付いた者はいない。金髪の少女を除いて。

「そうだな、手始めに我を含めて、新たな名を決めるとしよう」

主たる少女は完璧な動作で跪いている茶色の髪をした少女を向く。すると、顔を向けられた少女は頭を垂れた。

「そう畏まるな、理のマテリアルよ。そうだな、生前の戦い方から……ふむ、よし！ 今日からおまえの名は星光の殲滅者。シュテル・ザ・デストラクターと名乗るがいい」

「星の光を以て敵を殲滅する者、私に相応しき名です。ありがたく頂戴致します。我が主よ」

主たる少女はシュテルの変わらぬ畏まった態度に内心ため息を吐くが、それが、この子の個性なのだろうと諦めた。出来れば家族の欠片を継承する彼女たちには親しく接しては欲しいのだが、主たる少女は、この問題は後々解決策を探すと後回しにして、青色の少女に目を向ける。

青色の少女は見つめられると、顔を輝かんにキラキラさせ、瞳は期待に満ちていて、主たる少女は若干引く。それでも、期待には応えねばと彼女は頭を捻っていたが、先に青色の少女が口を開いた。

「実はボク、もう自分の名前は考えてあるんだ！」

「ほう、申してみよ」

青色の少女が考えた名前、それに多大な期待と興味を主たる少女は抱いた。我が子であり、家族であり、友の一人である少女がどんな名を考えたのか、物凄く気になるのだ。もっとも、他の三人の守護騎士は青色の言動からイヤな予感を感じている。

青色が立ち上がり、左手を腰に当て右手の親指で自身を差して新たな名を言い放った！

「ボクの新たな名！偉大なる名を聞いて驚け！」

「……その名は？」

「疾風迅雷の化身！スーパーウルトラデラックスライトニング！」

白銀世界。雪が降り積もり、静寂が支配する世界に真の静寂が訪れた。主たる少女はバリアジャケットによって感じない筈の寒さを感じた。他の守護騎士も同様で、金髪の守護騎士は呆れすぎて倒れたし、シュテルなんて壊れたように「
ちゃんがコワレテル：

…… ちゃんが……と、うわ言のように繰り返している。

肝心の青色本人は、ふふ〜ん、どうだい？かっこよいだろう！と言わんばかりに勝ち誇った笑みを浮かべている。

やがて、最初に立ち直ったのは主たる少女。身体が小刻みに震え、

青色を指さすと溢れんばかりの怒声をあげた。

「そんな！恥ずかしゅうて、訳の分からへん名前！誰が許可するんか！！」

その声量と溢れ出る怒気に青色の少女は思わず竦み震え上がる。本当なら拍手喝采に包まれるはずが怒鳴られたので、訳も分からず震える。

「ひゃいッ！でもでも……せつかく考えたカツコイイ名前なのに……」

「却下や！却下！！真剣に期待した私がアホやった……」

主たる少女は肩で息をするほどに脱力する。思わず杖を付いてしまった程だ。生前のオリジナルは大人しく聡明な子。元にした素体から、こんなアホの子が生まれるなんて誰が予想しただろうか。

（いや、 ちゃんは天然な所があつたし、 は子供ぽかった。可能性があつたとはいえ、これ程とは。我に矯正出来るのだろうか……）

あらゆる意味で気力を使い果たした四人の少女と、名を却下されうなだれる少女。主たる少女は気を取り直すと、咳払いをして皆の注目を集めた。

「今の出来事は私の記憶から消す。何もなかった、そうであるっ？」

主の問いに青色の少女を除く三人は頷いた。

「しかし、困ったものだ。どんな名が相応しいのか思い浮かばぬ。なまじ格好悪い名ではこやつも満足せぬであろう」

主の悩み。それに答えたのは星光の殲滅者シュテル。彼女はうなだれる青色の少女を横目で見ながら主たる少女に意見した。

「では、私の名と同じく彼女の戦い方から名を付けるのが良いと思います。そうですね、雷刃の襲撃者、レヴィ・ザ・スラッシャーなどは如何でしょう」

「ふむ、悪くないな。ほれ、いつまでも、うなだれとらんでしっかりせい」

「ほえ？」

「今日からお前の新たな名は雷刃の襲撃者、レヴィ・ザ・スラッシャーだ！光栄に思うが良い、我とシュテルが決めた新たな名を」

「雷刃……スラッシャー……とつてもカッコ良い名前だ！ありがとう！大切にするよ！！」

その時のレヴィの笑顔は太陽のような眩しい笑顔で、思わず微笑んだ四人だった。

「さて、残りの守護騎士にも新たな名を与えねばならぬ。しかし、困ったことに良い名が思い浮かばぬ」

主たる少女の言葉に名を付けられていない二人もつられて困った顔をする。シュテルは主たる少女の言葉を聞くと、頷いて返事をした。

「確かに私やレヴィは生前の戦い方から名を頂きました。しかし、残りの二人は戦闘経験もなく知識として戦い方を知っている程度。同じ方法で名を付けるのは困難だと思います」

「ぬう……………」

シユテルの言葉を聞き、ますます悩み頭を抱える主たる少女。そんな様子の彼女に助け船を出したのは、皆の様子を黙って見ていたレヴィだった。

「ねえねえ！ボクが名前を提案するよ！いいでしょ！」

「さつきみたいに恥ずかしい名前だったら、アンタをぶっ飛ばすからね！」

レヴィの言葉に金髪の少女が一応、釘をさしておく。金髪の少女は恥ずかしい名前を付けられるのは己のプライドが許さないし、何より後の黒歴史として他の四人にネタにされるのは嫌だった。

金髪の少女にレヴィは、大丈夫、大丈夫と答えると、上目遣いに主たる少女を見つめた。

「ねえ……………いいでしょ……………」

(くっ、その表情は卑怯だぞレヴィ。そんな顔をされたら我が断りきれぬではないか……………)

主たる少女は別の意味でさらに悩む。レヴィは先程の自身の名を語った時の前科がある以上、ろくな名前ではない気がする。もし、厨二病全開の名前だったら金髪の少女と揉め事になり、面倒な事態に

発展するだろう。だが、断れば……………。

(断れば……………恐らく子供っぽいレヴィのことだ。きつと、いや、絶対に泣き喚くであろうな……………)

どうすれば良いのだ！と主たる少女は内心で叫び、悩みに悩んで結論をだした。

(こうなれば、仲間を頼るしかあるまい。念話はレヴィにも聞こえてしまう、なれば、アイコンタクトで意志を通じ合う！)

以下、主たる少女とレヴィを除く守護騎士たちのアイコンタクトの内容である。

シュテルの場合

(シュテルよ何か良い名案は無いのか、我は決断を迷っておる)

(ありません。主よ)

(速答だと！貴様、それでも理のマテリアルであろう？主たる我に名案のひとつでも出して、我を助けてくれ)

(無理です。以上)

(この薄情者めが……！)

(……………)

金髪の少女の場合

(よ、何か良い案はないか？)

(とりあえず、怒らないから喋らせてみなさい)

(良いのか？)

(べつ別に…アンタが困ってるから助け船を出した訳じゃないんだからね、うう……だいたい…)

(頬を赤らめて、もじもじしてる姿しか分からぬ)

紫色の髪の子女の場合

(よ、何か良い名案はあるか？)

(ううん、一度喋らせてみるしかないかなあ)

(やはり、それしか方法はないか？)

(うん、下手に断るとレヴィちゃんが泣いちゃうと思うから)

(だろうな……よし！我は決断した。貴重な意見を感謝する)

(がんばってね)

こんな感じで彼女たちは瞬時に意志疎通を行い、主たる少女は迷いを断ち切り、決断する事が出来た。

主たる少女は再びレヴィに目を向ける。レヴィの顔は花が咲かんば

かりにキラキラと輝いていて、彼女がどれほど主たる少女に期待を抱いているのか分かるくらいだ。

「レヴィよ、お前の意見を述べてみよ」

「いいの？」

「構わぬ、今はどんな意見でも取り入れるべき時、正直に言えば、気が乗らぬが仕方あるまい」

「わーい！ありがとう　　〜〜！」

意見を述べる許可を許されたレヴィはその瞬間、大きく喜び、主たる少女に抱きついた。

「こらっ！抱きつくでない！暑苦しいであろうが！！」

主たる少女はそう言ってもがくが、本気で振りほどく様子はなかった。どうやら悪い気はしないらしく、実際に少し照れているのが、やや赤くなつた頬から感じ取れる。

「主よ、話が進まなくなります。戯れも程々になさってください」

その様子を見ていたシュテルが話を進めるために止めに入った。言葉に若干の棘が在るのは嫉妬しているのだろうか、それは、シュテル自身にも分からなかった。

主たる少女はレヴィをなだめると咳払い一つして、再び跪いたレヴィに目線で申してみよ、と伝える。レヴィはそれに頷くと新たな名を伝える。

「バーニング　とナイトメア　」

レヴィが考えた名前を聞いて悩む三人の少女たち。悪くはない名前ではあるが、問題点もあつたのだ。

ニコニコと笑うレヴィを見ながら、最初に悪い部分を指摘したのは主たる少女。

「お前の考えた名前は存外、悪くはない」

「じゃあ、採用してくれるの!？」

「話を最後まで聞かぬか!しかし、かつての名前が入っているのは頂けぬ」

「あつ……………」

主たる少女の指摘を受けて、しまったという表情をするレヴィ。その顔を心の内で呆れながら無表情にシュテルが話を続ける。

「それにミッドチルダ語が使われているのも減点です。私やレヴィはベルカ語なので言葉を合わせましょう」

「ガーーーーン……………」

容赦ない二人の指摘に雪上でうなだれるレヴィ。先ほどまであつた自信は見事に消失してえり、どんよりした雰囲気放っていた。

それを見かねた金髪の少女がフォローを入れる。その役目は昔から

少女が得意としていた分野だ。

「まっ、あなたの考えた名前も私たちの的を得ていて良かったわよ、別に全部を否定してるワケじゃないんだから、しょぼくなくても良いじゃない」

「でもでも……………」

金髪の少女のフォローを受けて少し立ち直ったレヴィ。そんな様子の彼女を完全に立ち直らせるために言葉をかけたのは紫色の髪の少女。いつだって彼女の役割はみんなを支えることだ。

「それじゃあ、レヴィちゃん。レヴィちゃんが考えた名前をもっとカッコ良くする為に皆で考えるのはどうかな？」

「もっとカッコ良く……………？みんなで考える……………？」

「そう。みんなで頑張ろう？」

「うん！ボクもみんなと一緒にがんばる！」

二人の励ましを受けて見事に立ち直った様子のレヴィ。その様子を見て、悪くない関係だと主たる少女は思っただった。

「バーニングとナイトメアか」

主たる少女の呟き。その言葉を理のマトリアルであるシュテルが解説してくれる。

「燃え上がる炎と悪夢という意味ですね。ベルカ語に変換するとア
オフ・ローダーンとアルプ・トラウムになります」

(うわぁ……………)

(なんか、ダサイわね)

(なんだかカッコ良くて、キレイな名前じゃないな)

正直に言えば名前には向いてない言葉だった。むしろ名字と言う方が
聞こえが良く、レヴィですら内心で少女らしくない名前だと考える
ほどだ。

(やはり、ベルカ語のみに限定するとダメか)

そんなふうを考える主たる少女に手を挙げて発言の許可を求める少
女がいた。金髪の少女だ。

「提案があるわ」

「申してみよ」

「正直、このままじゃ何時までたっても意見が進まないわ。私たち
の名前は自分で考えるから、決まった名前をアンタが再び命名して
ちょうだい」

確かに少女の言うとおり、このまま話を続ければグダグダになる可
能性も十分あり得る。ここは、生前で頭が良かった彼女に任せるの
も良いだろう。別に自分が考える必要もないのだ。

主たる少女はそう考えると頷いて許可を出した。

「良かるう。だが、考えた名前は我に耳打ちして教えるのだぞ？」

「わかってるわよ」

こうして、金髪の少女と紫色の髪の少女は相談を始める。レヴィやシュテルと離れて円陣を組んで話す様子は、小さな子供が内緒話をしているように主たる少女には見えた。そして同時に主たる少女は自身の考えから自責の念にとらわれた。

（あの微笑ましい様子でさえ、かつての学校生活では当たり前のこと、それを奪った我は外道にも劣る極悪人か……………）

その少女の様子を見たシュテルとレヴィは無意識に手を強く握りしめ、どこか思いつめたように歯を食いしばった。

やがて、考えが纏まったのか金髪の少女が代表して主たる少女に耳打ちする。金髪の少女の言葉を聞いた主たる少女は驚いた顔をしたが、それも一瞬の事で、すぐに真顔に戻る、そして、再び跪いた少女たちに顔を向けた。

少女が名を告げる。堂々と言葉を発するその姿、雰囲気は王としての威圧感とカリスマ性に溢れており、他の者がいれば自然とひれ伏してしまいそうだ。

まず、主たる少女は金髪の少女に告げる。新たな名と存在を与える。

「お前の新たな名は炎の鳥。アスカ・フランメフォーゲルだ。我の剣となり我が前に立ちはだかる敵を焼き尽くし、我が道を明るく照らすのだ」

「その言葉、アスカ・フランメフォーゲル。確かに拝命いたしました」

今行われているのは神聖な儀式だ。少女たちの新たな旅立ちの前の準備。故にレヴィですら静かに言葉を聞く。

主たる少女は次に紫色の髪の少女に顔を向ける。紫色の髪の少女はドレス姿や美しい顔立ち、上品な仕草と相まって、主たる少女が油断すれば逆に引き込まれそうだ。アスカを騎士とするならば彼女は姫だろうか。

主たる少女は姫の気配に呑まれぬよう言葉を発する。

「お前の新たな名は夜の守護者。ナハト・ヴィルヘルミナだ。その力で我らを守り、我らを支えて欲しい」

「はい、ナハト・ヴィルヘルミナ。この命を持って、みんなを護りましょう」

そして、その神聖な儀式ももうすぐ終わる。全ての者が名を与えられた時、シュテルが主たる少女に声をかけた。

「主よ。私とレヴィも先程まで主の新たな名を考えました。受け取ってくださいか？」

主たる少女はシュテルの言葉を聞いて呆けた表情をしていたが、言

葉の意味を理解すると嬉しそうに微笑んで頷いた。

「申してみよ」

「では、我らの主。その新たなる名は闇統べる王。ロード・ディア
ーチエ」

「偉そうで、実際ものすごく偉いボクらの王様」

「王か……。よかろう。我は闇統べる王！ロード・ディアーチエ！
お前たちを導き、管理局に破滅を告げるものだ！」

ディアーチエの宣言と共に結界内部を風が荒れ狂い、雪上を乱した。
今、少女たちの神聖な儀式は終わりを告げ、管理局に対する戦いの
幕が静かに上がるうとしていた。

第2話 誕生した4人の守護騎士なの（後書き）

次回は短めですので一週間くらいであげられそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4631z/>

リリカルなのは アナザーダークネス

2011年12月29日12時49分発行